

教育相談活動にバウムテストを使用することについて

—ある養護教員の高校新入生ワーク事例から—

加藤 美智子

1. はじめに

バウムテストとは、心理臨床においてよく使われている描画テストの一種であり、A4版の紙に鉛筆で「実のなる木を一本描いて下さい」という教示のもと木の絵を描いてもらうものである。紙と鉛筆があれば手軽に実施できることが大きな特徴である。このバウムテストで描かれた絵（以下バウムと記す）を、なんとか生徒たちとの対話や生徒たちのことを「わかる」「知る」ことに活かせないかと考える教育関係者は多いだろう。心理教育として筆者も授業の中で試みてきた。その経験を踏まえて、この度、ある養護教員の実践について検討する機会が与えられた。多くの養護教員や教育相談担当者は、思春期・青年期の彼らが前を向いて生きていってほしいと願いながら日々の業務に明け暮れている。社会問題化している若者の問題は簡単に解決などできない。しかし、個々の地道な取り組みの中から大きなヒントを得られ場合もあるだろう。まさに、C.Rogersが言った「静かなる革命」という言葉が浮かぶ。

本論考は、先の養護教員の実践を参考に、思春期・青年期の教育相談的活動にバウムを用いることについて考えていくことを目的としている。

2. バウムを用いるために

2.1 成長を促す創造的な場でバウムが生み出すもの

バウムテストは投影法と言われる心理テストであり、バウムは、人の立ち姿、生きる姿を象徴していると考えられる。学校教育の現場でバウムを用いるとき、心理テストに対する認識を確認しておく必要がある。

まず第一に、心理テストは、標準的な普通の人と標準からのズレの程度とその特徴によって、何らかの判別を行うことを目的としている。しかし、思春期・青年期の人々の集う学校教育の場において用いるバウムテストは、この判別という意識から脱しなければな

らない。医療の現場において用いられる場合、医師の診断の補助に使われることが多い。しかし、学校教育の場では生徒の疾患や病理を発見・診断しようとする、思いがけずその生徒を「病気の生徒」「心理的に弱い生徒」「発達に問題のある生徒」と差別化をしてしまう恐れがある。中井(2013)は、精神医学における思春期の病理を語る際の難しさとして、この点に触れている。学校教育の場では、あくまでも、生徒・学生の心理的状況を把握し、潜在的可能性を見出し、本人に自己理解を促し、自らの適性を考え、彼らの人生に一筋の光を見いだすための補助的手段として用いることを確認しておかなければならない。そして、その描画であるバウムを補助的に用いるのは教育相談員と生徒・学生自身である。教育相談とは、広く生徒・学生が自らを成長させるために創造的な場を作り上げることでありと筆者は考える。その創造的な場にバウムが存在することで、生徒・学生と相談員とバウムの3項が連鎖して、生徒・学生の成長につながるという前提を押さえておきたい。

バウムテストの起源は医療領域ではなく職業指導の領域にあった。バウムテスト誕生の背景に存在する二人の人物、つまり、バウムテストを考案したユッカー(Emil Jucker)は職業コンサルタントであり、バウムテストを体系化したコッホ(Karl Koch, 1906-1958)は、青少年の職業指導や工場での人間性涵養の指導を行い、職業適性に関する研究を行った人物であった(岸本, 2010)のである。将来どのような職業についてどのように社会に貢献していくか、どのような社会人になっていくかという課題は、若者に共通する発達課題であり、教育の領域と密接につながる領域である。人間の人生の重要な岐路である職業選択の折に活用されていた事実は、バウムテストを教育の場で使用するに相応しい方法であることを示唆してくれているように思える。

コッホが取り上げているユッカーの言葉を以下に引用してみる。

「文化の歴史、とりわけ、神話の歴史を十分に考察し、長期にわたる研究の末にバウムと出会った。年来、おそらく1928年ころから私はこのテストを、テスト本来の評価をせずに施行してきたが、それは、少しずついくつかの経験的観察の大体のところを確かめるためであった。むしろ、本質的には、被験者の問題がはっきりしている部分を、純粹に直感に指摘するという形で、バウムテストを役立ててきた。私は自分の知識と能力の限界をよく知っているの、職業選択の診断に際して、一般の人にも、とりわけ被験者自身にも自ずと理解できるような、あるいは少なくともわずかな助けがあれば理解できるような、補助手段を探し出すことで長らく満足してきた。と同時に、人格全体を、その存在の深い層において把握する必要性、もう少し控えめに言えば、せめて漠然と察知する必要性も当然感じている。それで、私は、バウムテストを選んだのである。」

少々長い引用であったが、コッホもまた、このユッカーの関心と重なりを感じながら研究をすすめたと思われるのである。ここで分かることは、二人の先達は、人として歴史に根ざした確かな知見をもち、優れた観察力と直観力があり、自らの態度に謙虚であり、その人の「人格全体を、その存在の深い層において把握する」ことが職業指導や職業選択において必要であるとの認識を持っていたことである。これらの認識は、現代の学校教育に携わる者にとっても少しも古びていない認識である。それどころか、学校教育の場で生じているさまざまな問題に取り組む教育相談担当者にとっては、ことのほか重要な認識ではないだろうか。

また、コッホの著書「バウムテスト」の副題が、「心理診断の補助手段としてのバウム描画研究」となっていることを岸本（2006）は重要視し、意味論的分析手法を用いて、コッホの考えていた心理診断とはどのような事であるかの分析を試みている。そこで、岸本は、コッホにとっての心理診断とは医学的な意味の想定ではなく、現代の日本における心理臨床の世界でいうところの「見立て」であると考えられるのではないかと提示している。この提示もまた、学校教育においてバウムテストを使用するときの前提条件であろう。そのためには、「見立て」についての理解も深めておく必要が浮上する。

バウムテストの誕生した歴史的背景が職業選択という現場にあり、人間に対する謙虚な態度と直感を持ち合わせた二人の先達の理念を理解するなら、我々は現代の思春期・青年期の若者に対する指導や教育を行うとき、彼らの存在の深い部分からの理解に努め、どのような教育支援方法が彼らの助けになるのかを見立て、そのことを彼らにいかにつたえ、本人も理解し、自らの将来に向かって歩みを進める一つの機会を生み出すような教育的対応であることを忘れてはならないだろう。

2.2 バウムのイメージ性

バウムは、あらゆる形態の木が描かれる可能性を持っている。「木をかこう」という絵本には、樹木の種類や気候や場所によって木はどのように自然環境に合わせた形になっているかがわかりやすく説明されている。そして、枝分かれの規則性についても書かれている。この絵本によらずとしても、常識的に木の形態は様々であることは理解される。私たちが知らない木が描かれていても、安易に奇異であるとしてはならない。木の形態には、その環境下において生き抜くための知恵が含まれていると見よう。

バウムは、自然界の木を写生しているのではなく描き手の木のイメージ表現であるということ、そこには少なからず描き手本人の生き方が投影されていると理解したい。では、イメージとは何なのかを理解しておく必要性も浮上する。

イメージとは、五感のすべてを使って感じるものであり、特に視覚的映像を伴って出現

する。このイメージについて藤岡・吉川(1971)は、「何かに関するイメージは、個人の精神において、生活の履歴とともに、だんだんに形づくられ、保存され、条件によっては改変されもする」と述べている。今ここでイメージについて深く述べることはしないが、イメージと親和性を持つことがバウムにとって重要なことである。イメージは通常、言葉や表情や身体や描画によって表現される。しかし、そのイメージを感受する能力は、現実的対応に迫られている慌しい生活のなかで働く人間には難しいことかもしれない。イメージの世界に流れる時間に入り込まない限り、その感性は、なかなかその深い層まで届かないように思える。ある身体の準備状態を整えなければ、存在の深い層に届く感性を働かせることは難しいであろう。

バウムがイメージ表現であると考え、絵が上手い下手という描画力は問題にならないことが分かる。そしてバウム理解において、イメージに対する施行者の態度が問われることも認識しておかなければならない。

2.3 読み取りの基本としての態度

2.3.1 視覚から受取る感性

言葉を使うことによってイメージが変容してしまうこともありうる。しかし、バウムのような描画は直接的に何かを訴えてくる。教育の場において生徒・学生との対応では、言葉に表現されているものだけではなく、言葉の背景にあるその人の存在の深い層に到達する感性を働かせることが求められる。しかし、言葉のカーテンはなかなかその背景を見せてくれない事も多い。その点、イメージ表現であるバウムは、視覚を通して直接的に伝えてくるものがある。

その時、標準的なものからのズレについても冷静に把握しており、視覚から感じるものを受取る感性を磨いておかなければならないだろう。

紙面に描かれたバウムが、「遠くポツンと描かれたバウムの淋しさ(青木, 1986)」といったように読み取れるかどうかである。青木は、人間はある共通の視覚的概念を持ち、バウムを小さいとか大きいとかの印象を持つのだと説明する。そして、視覚的概念は認知的なものや表現的なものに分けられ、標準的な大きさという基準を持って判断し、個人差の大きい表現に対しても読み取る基準を持っているという。我々は、その基準を基にしながら、バウムから、本人も気づいていないかもしれない、淋しさや弱々しさを受取るが必要になる。描線の特徴から判断された弱々しさと、バウム全体から漂う淋しさが実感として感じ取れるなら素晴らしい。そして、その実感をいかに言葉にして伝えるかという試練も続く。青木は、左上に小さく描かれたバウムについて、「用紙上の最も遠い場所に、ぐっと身を縮めて小さくなる事で、中央部へと引きずり出す一般的な作用に対抗している」と

読み取り理解している。「こんな隅にぼつんと小さくしか木が描けないなんて良くないなあ。もっと大きく真ん中に描けばよいのに」と考えてしまう態度とは大違いである。

同じ小さなバウムといっても、やはり、その描かれている位置というのは大きな意味を持っていると思われる。筆者は授業の中で施行したバウムの中で、小さなバウムではあるが用紙の中央に書かれたバウムに出会ったことがある。そのバウムは小さいながらも実をつけていた。しかし、木のスタンプを想像させるような個性の感じられない形態であった。初めは、なかなか言葉が出てこないほどに身体が硬くなってしまった。しばらくバウムを眺めていると、小さく座り込んでいながらもその場所は真ん中であり、でんと座っていて動かない頑固さのようなものを感じた。その若者は、教育上の多くの場面で指導され、問題があると言われていた。知的には高く、成績も問題のないものではあったが、どうしてもできない科目もあった。バウムから読み取れる頑固さと、存在の萎縮、形態のまとまりと未熟感などと現実のエピソード、そして本人の有り様から、指導方法が少しずつ見えてきた経験がある。先の青木の読み取りを参考にすると、一般的な社会の常識の真ん中に、必死になって留まり、ぐっと身を縮めて小さくなり、硬くなり、自らの生長を促す事ができない間に、周囲からの評価は悪くなり、より頑なに座り込んでいる悪循環の中に居る姿が見えてくる。この姿が見えると、指導や教育の方法も自ずから見え始めるから不思議である。

バウムは、そこに結実した絵として、直接的に訴えてくる力を持っている。木のイメージに表わされる、その人の深い部分を感じ取る可能性をバウムは提供してくれる。そのときに、通常多くの人が描く描き方や時代や民族によって特徴づけられる描き方を標準指標として知っておくことの重要性が浮上してくるのである。

2.3.2 健康さを受取る

そして、ここでもう一度思い出しておかなければならないのは、心理テストはもともと判別を目的とし、標準からのズレを判断する役割を持つということである。描き手の悪いところ、足りないところ、病的なところに注意を向けやすくする可能性があるということである。標準的な、平凡なバウムばかりを見ていると、イメージが滞り、バウムからの生き生きとした実感が得られないことからつまらないと感じたり、珍しいバウムに出会うと嬉々として解釈したがる欲求が出てきたりする。批判的にバウムを見る傾向は慎まなければならないことがわかっていても、出てきてしまうことがある。

学校教育の現場では、そのバウムを否定的側面だけではなく、肯定的側面や将来への可能性をもつものとして読み取る目が必要になる。肯定的とは言えなくても、バウムが今の状態をどのように訴えているかを読み取る必要があるであろう。先の例からすると、真ん

中に位置する自己中心性(頑固さ)があり、萎縮していると解釈するだけではなく、自分を頑固に主張しなければ消え入ってしまいそうな不安やその不安と必死に闘いながら社会の真ん中にいる努力をしている能力を読み取り、その能力が、何かにとらわれた不自由な使い方になっていることから解放し、自由な使い方発揮できる方法を考えるということになるだろうか。

3. A養護教諭の高校新入生との実践

3.1 実践の概要

A養護教諭は、長年養護教諭として教育相談について学んでこられた。そして、ある高校に勤務されている間に、子どもたちを表面的な理解だけではなく、内面的な理解と行動などに表現される真意を含めた全体として子どもたちの姿を理解したい、と試行錯誤されていた。

保健室には多くの生徒がやってきて身体の不調を訴える。確かに微熱があったり顔色が悪かったり、頭痛がある腹痛があると苦しそうな様子がある。しかし、特に身体的病気という判断は即断できず、「うーん、きっと心に関係しているなあ～」と感じる子どもたちが間違いなく存在することに、どう対処したらよいかと考えるようになった。身体表現が出てきてしまう前に、少しでも子どもたちに対応できないだろうか考えたことが、まずは教育における実践の重要ポイント①である。予防的視点があるともいえる。

そして、試行錯誤を重ね、A養護教諭は、勉強されていた「バウムテスト」を新入生に実施された。高校の管理職者に了解も取りながら(決して養護教諭が勝手に行ったわけではなく、管理者との連携のもと、守秘義務にも考慮しながらの実践であったことが分かる)、自分の行動することを考え、実施されたのである。何年もの間新入生のオリエンテーションの折に、身体の様子を聞く質問用紙の裏にバウムを描いてもらったり、メモ用紙的な大きさの用紙に描いてもらったりしていた。バウムテスト用の用紙や筆記具を使うことにこだわらず、とても日常的な活動の中に組み込む形でバウムを取り入れていったことが、教育における実践の重要ポイント②と言えよう。医療においてバウムテストをテストバッテリーとして使う場合、調査研究としてバウムテストを研究する場合には、このようなテスト施行方法は統一する必要が強調される。今、A養護教諭の目的は、「生徒のことをもっと内面から知りたい」であったと考えられる感性和行動力を支えに、子どもたちの援助になるであろうとの予感で実施されたと思われる。ここに教育における実践の重要ポイント③がある。心理テストの専門家のアドバイスがあれば良かったという点もあるであろうが、専門家のアドバイスを聞いていたら実現できなかったという側面もあるであろう。

う。時が経ち、子どもたちのバウムを初めて筆者に見せ（スーパーヴィジョンの目的で）、自分のバウム理解について考え、長年のバウムを用いた養護教諭の教育相談的活動の意味を考えたいとの考えに至ったという。ここに、子どもたちのプライバシーを守ろうとする誠意ある教員の姿勢がみられる。

バウムは、個別に施行する場合と集団で施行する場合の違いも専門家の間で問われている。また、バウムの作成者を知らずにバウムだけを見て不用意に分析することも戒められている。A養護教諭の実施の仕方も集団式に属する。しかし、それはワークという形態をとり、教室でクラスごとに行われた。“「木」の絵を描くワーク”の実施である。そこには、“かかわりをつくる出会いのミニワーク”という考えがあり、“人には一人一人特有の感じ方、考え方、行動があることを、「木」の絵を通して知ってほしい”とのメッセージを生徒に伝えることが目的としてあった。この動機付けがまず教育的であり、実践の重要ポイント④がある。一人一人が描く「木」の違いが、自分のものさし、価値観、枠を知るための道具としてバウムを捉えていたのである。

教示の仕方がユニークである。「あなたの頭に浮かぶ『木』の絵を描いてください」というものである。心理テストして施行する場合も教示は少しづつ施行者によって異なる。「一本の実のなる木を描いて下さい」「実のなる木を描いて下さい」「木を一本描いて下さい」などなどである。

そして、生徒が描いている間机間巡回を行い、その場に担任がいる場合は担任も木の絵を描き、全員が描き終わったら、周囲の人と「木」を見せ合って自由に感想を交流する時間をとる。

そして、また、ユニークな発想であるが、特徴のある「木」を描いている生徒に黒板に大きく自分の描いた木と同じ木を描いてもらう。（この時、どのような視点で特徴ある「木」と判断したのかを今後さらに明確にしたいところである。現在のところその詳細は不明である。）そして、黒板に描かれた「木」の一つ一つを示しながら、「この『木』と同じ『木』を描いた人はいますか」「似たような『木』の人はいますか」と聞く。そして、最後に養護教諭が話す言葉は、「同じ『木』を描いても、イメージする『木』は一人一人どこか異なっていますね。人は同じ言葉を聞いてもこのように受け取り方が異なるということを理解できたのではないのでしょうか」というものである。

次に、なぜ、一人一人の『木』が異なるのかについて考えてもらい、生徒に問いかける。「異なる受け止めの背景には、一人一人違う環境や、現在までの生活経験などがあるからではないでしょうか。だからこそ、人はみな固有の特有の考え方や感じ方などが形成され、人はみな異なるようになるのではないのでしょうか。人には一人一人特有の感じ方、考え方、行動があることをこの『木』の絵を通して知ってほしいのです。今日みんなに伝えたいこ

と、わかってほしいことはこのことなのです。」と話しかけながら、生徒に友人間のトラブルやトラブルの背景にお互いのどんな違いがあるかなどについて考えてもらうという教育的進め方をしている。そして、「自分が描いた『木』から、自分の感じ方やとらえ方を考えてみましょう」と続く。

幼い時のチャムグループから、ギャングエイジ、ピアグループへと集団の特徴が発達的に変化していくといわれる中、高校生の年代になると複雑な論理思考能力も上がり、自分の存在について考え、自分の将来の在り様について考え、深く人生とはと考えることも珍しくはない。そんな中、自分も他の人も特有の感じ方や物差しがあり、自分と同じでないことを思い出して、お互いにどう理解できるのかを考え、お互いを尊重できるピアな友人関係を作る橋渡しをするワークと位置付けている。自分と異なるから嫌い、ダメな人、合わない人、理解してくれないからと関係を切る、自分に同調しないからとなじる、虐める、などの行動につなげるのではなく、「異なっている」ことを受け入れるようにすることについて考えてもらう時間としている。

この「木」の絵のワークを行っていると、生徒はみな顔を上げて聞いてくれるという。養護教諭自身の青春期の話も出ることがあるようである。そして、どこか生徒と新しい関係が生まれたと感じたという。

生徒が描いた「木」の絵は、担任と生徒について話し合う際の潤滑油として活用もなされている。描かれた「木」の絵から、生徒の内面の世界を理解しようとするきっかけとしながら、担任と共有する時間が生まれるという。

そして、生徒を診断したり検査をしたりしているのではないこと、あくまでも生徒が自分の物差しを知ること、人はみな異なることを知り、理解させるためのものであると念をおしている。

3.2 バウムの指標と発達の指標について

バウム研究では、バウムの指標を設定して発達の比較していく研究は多数ある。コッホ (1953) は小1から中3まで、中島 (1981～87年に調査) は年少～小6まで、岸本 (2010) は小1～高3まで、佐渡 (2015～18) は年少～高3まで、の調査をしている。このような研究では、ある指標 (一線枝、ふくらみのない幹の根本) は何歳ごろまでは見られるがその後は出現率が少ないという見方や、ある年代からある指標 (二本線で描かれる幹) は見られるようになるなどの見方をすることが多い。高校生のバウム指標は何かなどという興味はそそられるものであるが明確に示されるものではない。ただ、ある年代からはほとんど見られないとされる指標が見られるとき、特異な表現と言われる表現が見られるとき、病に見られるといわれる指標などが表れているときは、その生徒が苦しく辛い思いを感じて

いることを想像することは必要であろう。しかし、この見方が強すぎると、精神科診断が難しいといわれる思春期の子どもたちを安易に精神科領域の病とみてしまったり、安易に対応に不安を感じたり、逆にその可能性を否定して本人の大変さを無視したりする危険も生じる。指標にとらわれることなく、そのバウム画に表現されている生徒の特質を感じ取ることが求められる。

3.3 ワークで描かれたバウムの概観

今回、検討したバウムは、A養護教員がB5用紙に健康調査をした用紙の裏に描かれた246枚である。その特徴を概観する。

3.3.1 木の大きさ

246枚の絵を見ていて一目瞭然なのは「木」の大きさと位置である。B5用紙は、横18.7cm×縦25.7cmである。最も小さいサイズのバウムは横1cm×縦1.5cmで2本あった。その描かれた位置は一枚は真ん中、もう一枚は真ん中やや下であった。横3cm縦4cm以下のバウムは25本。このサイズのものは、一目で「小さい」と感じる。描かれた位置は左上に11、上中央上に6、右上に3、ほぼ用紙中央に5、のバウムが描かれていた。このサイズの小ささをどのように受け取るか。小さめの木であっても、横4cm×縦5cmほどの木の大きさになるとその存在がしっかりと伝わって見えるから不思議である。

一般に空間配置的には用紙の左側は過去、右側は未来に意識されていると言われる。そこから考えると、過去の自分は小さく縮こまっているようにも思える。小さな木であってもしっかりとした筆圧で描かれているものと、消え入りそうな薄く細い線で描かれているものがある。また、木の形も幹と樹冠だけのもの、木が閉じられた空間として描かれているもの、幹の表面に筋が入っているもの、幹が定規で描いたものなど、養護教諭が考えるようにそれぞれの小さな木にも個性がみられる。どのような理由かは分からないが、とにかく、高校生になってオリエンテーションの場で小さくなって座っている一群の生徒がいるということとして考えておきたい。

次に、用紙をはみ出すほどの大きな木は4本。4本ともに上にはみ出している。木の右半分がはみ出している（描かれない？）ものもあった。

その他のものは、ほぼ用紙の中央に用紙の7割～9割程度の大きさに収められていた。

木の大きさを見ることは、バウムと空間性の関連も考えなければならない。「描き手固有の心的空間に規定されている」というコッホの言葉は考慮しておく必要がある。

3.3.2 幹の特徴

今回の高校生の木の絵は、幹が太く幹の上が開いたまま樹冠に繋がっているものが目についた。木が普通サイズであっても小さくてもである。ところが、はみ出すほど大きな木のすべては、幹の上は枝に繋がっていく描き方になっていた。バウムテストでは幹から枝に分かれする部分は注目され、この部分を描くことは難しいことが理解されている。筆者は、枝分かれは自我の成長と関係すると考える。そして幹から枝への分かれ目は、それまでに家族などの関係の影響を受けながら培ってきた自分から、自分自身が自分の生き方をする自分を築きあげ、そういう自分を理解できていく始点である。この部分を描いている高校生の木は、246本中69本であった。青年期前期の高校1年生の健全な自我発達状況ではないだろうか。しかし、この自我発達作業が難しいことから連想するに、この幹から枝への分化がうまく描けずに樹冠を黒い線で覆ってしまったり、妙なふくらみの枝になったり、枝の先が描き切れなかったり、さまざまな表現の不安定さが見られた。高校生のほほえましい苦悩を感じる。

3.3.3 平均的ではない木

まず、黒く木を斜線で塗っている木が23本あった。樹冠だけを塗っている木、幹の淵から樹冠を斜線で覆っている木、ぐるぐる螺旋で埋め尽くしている木、殴り書きのような線で荒く塗っている木などがあった。どこかイライラしているような、攻撃的なような、自分を覆いつくしている黒いものがあるような、それぞれいろいろな連想が働いてくる。非常に画力があると思われる木は、影をつけ樹冠も線で塗っており小さめの木であった。この木は描き手の何を象徴し投影しているのか。簡単に連想は働かない。どこか他者を踏み込ませない意志のようなものを感じる。

そして、木の形態に奇異を感じる木があった。どこか恐竜が暴れているような印象がする木である。描き手の中で何かが起きているような印象である。また、先の黒塗りの木の中で樹冠が薄黒く塗られていてそこに目と口が描かれている。じっと中から外を見ているようであった。

いろいろな果実がなっている木も一本。このような異種類の実がなっている木は他の調査の時（中学生や大学生対象）にも時々見る。奇異ということではないであろう。一本の木に異種類の実をつけることは自然界ではない現象であるので、空想的で欲望のすべてを實現したいという誇大性も連想される。

また、枝先が剣のように尖っている木、とても繊細で神経が細い大人びた印象の木、発達の幼児が描き小学生高学年頃には消えるとされている特徴を持つ木も見られた。

このように様々な木を描く高校生が、一同に同じクラスで同じ内容の学習をすることの

難しさは容易に推測される。高校生はそのような環境の中で、どのように生き抜いていくのか。そこに虐めや盗みや学外での非行や引きこもりや不登校などといった現象が生じていることは、この木の絵を見ている限り不自然なことではないようにさえ思える。A養護教諭が、この木の絵のワークにおいて、一人一人の違い、それぞれ違う自分と相手への理解を促すことを目的としたことは、現代の教育の根本へのチャレンジのように思われる。

4. 幹先端について

4.1 幹先端の処理

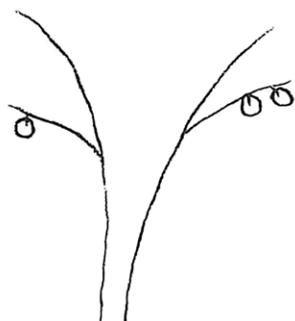


図1 漏斗状幹上開(松下, 2005より)

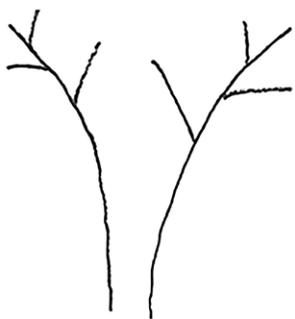


図2 メビウスの木(松下, 2005より)

枝別れする基点となる幹から枝に移行する部分の処理については、とても重要であるとの見解が多い。バウムそのものに発達的な成長があり、その分化の類型が見られることを藤岡ら(1971)は述べている。幼稚園児の30%程度には電信柱のような幹に板を釘で貼り付けられたような枝が伸びているバウムが見られ、小学校高学年になるとほとんど見られなくなるとされている。藤岡らによると、幼型のバウムを眺めるなかで幹の先端にバウムの全姿を類型化する手掛かりを発見し、幹先端処理という概念を提唱したという。幹先端処理とは、二本線で構成された幹の先端をどう描くか、どう処理するかという描画行為上の課題であり、近年注目されている。

この幹先端処理に関する研究には、そもそも統合失調症の患者のバウム研究から見出された「漏斗状幹上開」や「メビウスの木」(山中, 1976)から知られるようになった。また、岸本(2002)は幹先端処理の新たな分類を提唱し、幹先端が開放している場合は自他や内外における境界の脆弱性が見られると述べた。また、吉田ら(2007)

は、青年期の課題の取り組みと友人関係の特徴の関連を幹先端処理に着目して検討した。

ここで重要なのは、幹の先端の開放には、自我境界の脆弱さを読み取られているということである。自我の境界の脆弱さは深刻な問題に繋がることが多いので注意を要するということになる。一義的に病理として理解するのではなく、そのバウムの中での開放具合、バウム全体との兼ね合いを見ながら、心に留めておくことが必要になる。

「漏斗状幹上開(図1)」とは、山中(1976)が非定型精神病および統合失調症の患者の

バウムに特徴的に見られるとした、幹の先端処理に関するバウム形態である。「漏斗状幹上開」は上にいくほど広くなり、幹先端処理がなされず、上部が突き抜けてしまっているバウムである。そして、「漏斗状幹上開」は、あたかも幻聴や作為体験など、他者からの影響が勝手に外部から侵入してきたり、自我漏洩のごとく、内部から自我内容が漏れ出てしまうことの、そのいずれもが可能なイメージとなっている(山中, 2003)と説明されてきた。さらに、幹として引かれた線が上部でそのまま枝に移行しているために、幹の部分では、内側に内空間を形成していた曲線が、そのまま上部では枝として外空間を形成してしまうものを「メビウスの木(図2)」と呼んだ。これらは正常および神経症ではほとんど全くと言っていい程みられないことが知られていたが、岸本(2002)は心身症者や癌患者にも認められると指摘しており、時代や人間の変化を考慮しなければならないのかもしれない。診断名が分かっているバウムを丹念に検討することから見出された見解であるが、これらのバウム形態から安易に精神疾患と判断することは極力控えなければならないのはコッホの姿勢で言われている通りである。

4.2 幹先端の処理についての方略

数多くのバウムを検討していく中で、幹先端の開放の処理には大きく二つの方略が見られると考えられた(奥田, 2005)。

(1) 分化

まず一つは、「幹先端を枝などとして分け伸ばしていけばよい」というもので、「分化」と呼ばれている。奥田(2005)によると、分化の感覚には、幹の持つ内実を何らかの方向へと発展させていく感覚があり、開放の処理とはまた別の、幹先端処理が喚起する課題が混在していて取り組まれているという。それは「幹の内実を、何らかの形にしていくこと、方向づけていくこと」である。この感覚が描き手に体験されるがゆえに、幹先端処理がアイデンティティ決定のあり方と関連していると解釈し、幹先端に取り組む時には「これまでの幹(わたし)からつながるまだ未決定なままの、しかしそこから伸びて行くであろう私の未分化なエネルギーを、どのようにしていこうか」とでも表現されるような逡巡が生じることがあり、それが同一性獲得への姿勢と重なるのだと、奥田は述べている。そして、分化を「幹の内実・エネルギーを何らかの方向づけをして処置すること」と定義している。

(2) 包冠

幹先端を展開させていく分化に対し、もう一つの幹先端の開放への対処様式として「幹先端を何らかの形で包んでしまえばよい」という方略が考えられるものを「包冠」という。奥田(2005)によると、樹冠を形成する包冠線で、幹先端を包んでしまうことによって、

開放が落ち着くと説明している。分化との違いは、幹からの展開に重きをおかず、むしろバウムにとって外界となる樹冠外の周囲の空間との間に何らかの境界領域を作ることに重点があることである。包冠は、樹冠部が社会性や人間関係のあり方を象徴するという解釈につながり、周囲との関係を意識しつつエリアを形成するということは、幹先端処理を行う際に「外との関係をいかに作っていくか」「自らを周囲に対していかように提示するか」という感覚が生じていることを意味するという。通常このことは樹冠部の解釈によって語られることであるが、幹先端に取り組むことは必然的に樹冠部を形成することでもあるため、周囲との関係というテーマが幹先端処理でも同時に生じているという。また、アイデンティティ獲得が自分にとってだけでなく、社会・他者に対しても、自らが「何者であるか」ということを示し受け入れられていかなければならないこととされているのは、幹先端のこの包冠の感覚と共通であると説明している。そして、包冠を「一定のエリアを形成することで先端を包んで処理すること」であると定義している。

また、幹先端処理において描き手に引き起こされうる感覚には、①幹先端の開放をどうするか（さらされ感、護り感）②幹の内実・エネルギーをどう方向づけるか（自己の形成・アイデンティティ獲得感）③外・周囲との関係をどう作っていくか（つながり方、自己呈示のあり方）などがあると推察されている。未分化なままの先端部（わたし）を、外を意識しつつ何がしかにしていく、という体験だとも説明されている。これら幹先端処理に対する方略である「分化」と「包冠」は、ともにそれらの課題に応じつつ、分化では幹の内実・エネルギーの方向づけに、包冠は外・周囲との関係構築の課題に重点が置かれて処理されていると考えられてきている（奥田, 2005）。

(3) 塗りつぶし

奥田による幹先端処理の分化でも包冠でもない曖昧な方略を経験したことがある。

そのバウムは個別面接の中で描かれた。初めは幹の先端が開いたまま、枝や葉を書いていたが、その途中でどうしても幹の先端が気になるのか、絵を描くというよりはその幹の開いた先端の上で迷っているとでもいうように何度も薄く鉛筆を動かし始めた。半ば鉛筆が空を切りながらろうじて画用紙に触れているといった状態であった。なんとなく幹の先端の開いた部分が気にならなくなるほどに空間を埋めていったのである。そうすると、全体のバウムは、幹先端が木全体になじみ、不自然さがなくなっていたのである。描かれた木として不自然ではなくなったのである。

ここでは何が起こっていたのだろうか。奥田の説に従いながら考えると、「幹の内実を、何らかの形にしていくこと、方向づけていくこと」が出来ず、かといって、包冠のように、包み込むことで外から護るほどの方略は持たず、しかし、幹の先端がその先のバウムを描

き続けるには、どうしても気になり先に進めなくなり、しばしその上で立ち止まり、明確な方略は見出せず、曖昧に塗りつぶすことを発見したのではないだろうか。何事も明確に結論づけず、曖昧なまま、なんとなく調整し、毎日の生活を送り、将来について不安になっているということではなかったのだろうか。

この若者は、優秀であり大学院まで進学して専門職を目指していた。しかし社会や他者との関係が上手くいかず、常に不安になり、迷い、混乱し、泣きじゃくっていることが多かった。あるいは、話始めると留まることがなく話をしていた。聴き手は話の内容が理解しにくく、じっくり聞くことができずにお説教まがいのアドバイスをすることに陥ることが多かった。この状況とバウムの幹先端の処理の仕方を重ねると、幹先端の曖昧な処理としての塗りつぶしという方略があると思われたのである。

いずれにしても、幹の先端が開放されたままになっているバウムは、描く者にとっても見る者にとっても不安を呼び起こす。幹の先端から枝別れになっていく分岐点の描かれ様は、注目に値する部分であると考えられよう。

4.3 幹先端処理の分類

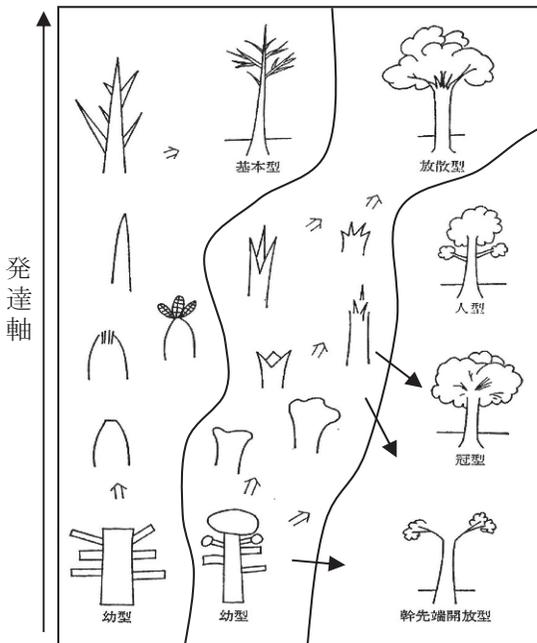


図3 幹先端処理の類型 (藤岡, 1971)

幹先端処理については、描画の発達の分類も行われている。藤岡ら (1971) は、バウムの類型化にあたって幹先端処理に注目し、「基本型」「人型」「放散型」「冠型」の4つの類型に分類している (図3 ※図中の矢印や線、発達軸は金沢 (2012) が加筆したものである)。さらに、岸本 (2002) は詳細な分類を試みている。人間の発達に伴うバウム形態の変化の類型を知る事は、バウムの描き手の発達の背景を理解する意味や将来への変化についての見立ての参考にする意味でも、今後検討を重ねるべき事項であろう。

先端が開放したままの先端処理になっているのか、その開放部分がどのように処理されているのか、バウム完成画においてもバウム作成過程においても注意しておく必要性を再確認しておきたい。

5. 個別にバウムを挟んで行う対話の重要性

バウムを使用する場合、個別の施行であっても今回のようなオリエンテーションや授業などの集団の施行であっても、バウムは描いて終わりではなく、バウムを間において十分な対話を行うことにより、バウムが伝えるもの、バウムからの広がるもの、バウムから語られる話題、バウムから気づく自分のあり様、自分への理解、教員の生徒への理解などが得られる。バウムはバウムを理解する教員（大人）と生徒・学生との人間関係の質によってそこに生み出されるものの豊富さが決まってくる。授業などで一斉に行う場合は、この個別の人間関係の基盤はなく、バウムを描くことがその人にどのような影響を与えているかについて詳細には分からない。それゆえに、投映法であるバウムの性質上、内的世界への侵入感を感じたり、自分を表出してしまう不安を感じたり、内面を投影する絵を描くことで深い傷つきが再燃する不安や再燃してしまう事態を予測することが難しいとされている。A養護教員のワークは、このあたりの危険性を踏まえたうえで、どのような方策がとられていたかは十分に検討しなければならない。生徒との交流をもつという視点が、ぶれることなく働いていることが危険を防いでいたようにも思える。

個別のバウム施行では、無理に描かせるということはまずあり得ない。医療における心理検査は、医師の指示があるという状況において患者がそれを拒否するという事態が生じることが稀であろう。しかし、学校教育の場面では、この無理強いは好ましくない。先のA養護教諭のワークにおいても、バウムを描かなかった生徒は2名あった。また、地平線を描いたうえで漢字の「木」を描いていた生徒もいた。それが許されていたということである。そして、A養護教諭の感性に反応して「気がかりになった」生徒に対しては、優しい文面でお手紙を書き、短い時間ではあっても話し合いの場を設けている。この配慮が学校教育の場でバウムを用いるときの重要なことであろう。

生徒本人のバウムへの関心、強いては自分への関心に繋がるという期待、本人の描いてみようという動機を大切にすることが必要である。しかし、集団においては、そこまで肌理細やかな対応はできない。無理に描かなくてもよいという指示をしたとしても、集団内に居ながら自分だけ描かないということはなかなか勇気のいることである。その生徒の勇気を評価したいところである。

そのように考えると、少なくとも単発の実施ではなく、一連の授業に組み込まれた施行であることが安心材料になると思いがた。また、施行者の人間性を授業内である程度は知っているという状況も必要になる。さらには、施行者が十分にバウムテストに精通し、バウムへの信頼を持ち、バウムへの謙虚さを持っていることも望まれる点であろう。ただただ興味本位での実施しても、ただただ興味本位の程度のバウムにしか出会えないであら

う。少しは自分の深い層に気づいて欲しい、少しは自分を表現して受取ってもらいたいと思える風土が存在していることが大切であると考え。

集団施行のバウムテストを施行すると、筆者の大学教育の授業での経験からすると、一斉施行をした後に、約1割の学生が個別のフィードバックやコメントを希望する。この1割の学生と面談する労を惜しまないことは言うまでもないことであるが、このような希望をしない9割の学生の心理への配慮も必要である。バウムと自分を繋げたくはないのかもしれない。それは必要性がないのかもしれないし、感性においてバウムではないのかもしれないし、今がその時ではないのかもしれない。いずれにしても、その本人の判断がとても大切であろう。そして、個別フィードバックを希望する学生には、丁寧にフィードバックをする義務があるであろう。

5.1 バウムを媒介にしたBさんの面談事例

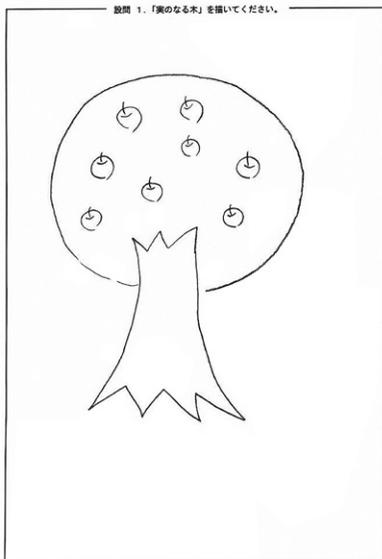


図4 Bさんのバウム (再現)

集団でバウムテストを施行し、その後、個別の面談を申し込んできた方の事例である。このバウムについての、当人の印象は「地面からいっぱい栄養とって実をいっぱいつける感じ。」であり、自分らしいところは「根っこですかね。やっぱり。」という。そして、「私の勝手な印象なんですけど、その地面っているんなものが積み重なって腐っているような栄養があるみたいな感じで、過去のことから学んでいろんな栄養をとるっていうのが私らしいかな。私の目指すところかな。」と話す。その後、結構実がありすぎるのが気になるという。そして、「ちょうど描いたときのテンションというか、イメージがその大学院からいらしている人がいるということで、私も大学院に行きたいなと思っていて、だから、未来への希望みたいなのがあった気がする。」という。また、このバウムの季節はいつごろかを尋ねると、「実がついている季節?いや、春…初夏からそういうイメージですね。でも、実のなる季節ではないですね。」と考え込む様子になった。

ここで、面談者には、初夏くらいの木のイメージが見え始めた。そして、果樹は、花が咲き、たくさんの小さくて青い実をつけ、それらを農家の人たちが選るという作業をすること、その作業があつてこそ、太陽があたり大きな美味しい実になるという話が思い出され、それをAさんに話した。バウムだけからは、この実が熟した実なのかまだ青い実なの

かは分からない。実がなっているという、自動的に熟して食べられる実と想像することが多いかもしれない。面談者にとっても、この初夏くらいの木という言葉聞いてはじめて、青い実という連想が働いたのである。そして、この連想とともに、このどちらかといえば平凡なバウムの新たな意味合いが実感できたのである。話を聞いてみないと分からないことであり、「ああ、そうなんだあ」と実感をもって納得できた瞬間であったといえる。この生きた感覚が生まれるということがバウムを媒介に語り合う意義であろう。

しかし、ここで面談者の勝手なイメージからの話である可能性もあるので、面接者の連想を本人がどのように感じているかを確かめなければならない。そこで、「青い実といわれてやっぱりイメージとは違う？」と尋ねてみた。「うーん…描いているときに実の熟し方とかはあんまり考えていなかったの。とりあえず、実…果実って言われたんでリンゴを描いてみた。」と話してくれた。

本人は面談者の連想との間にギャップがあったのかもしれない。しかし、一つのイメージの中で、少し自分の内側に目が向き始めたように思われる。

そこで、筆者は、実が枝についていないことに触れてみた。すると、少し間をおいて、「そうですね……。この絵を描いた後に…えっと、ちょうどこの絵を描いている頃に、その、自分の見つめ直しとかをやっている。なんか、あの、夢とか目標はあるけれど、自分がその、自分が何のためにとか、どうしてそういう夢を持つのかとか、そういう土台的な所がまだないなって悩んでいる時期でもあった気がします。」と語り始めた。バウムと重ねながら、そこから生まれたイメージをはさんで、自らの有り様を見つめ語り始めたのである。しかし、この場はあくまでもバウムのフィードバックの場であり、カウンセリングの場ではないのでそれ以上の話を聴くことはしなかった。

そして、この会話の流れの中で、バウムからの印象と本人の語りから一つの見立てが浮かんできた。この人は、自分に正直に生きようとしていて、色々な肥料（情報）を探し、蓄え、内省力もあるけれど、現在は素直な自分が表現できないのではないかと思われたのである。そこで、そのことを伝え、生活の中の課題として考え試行錯誤をしてみることを提案した。自分らしい絵を個性あふれる感じで描くことについて話し合いもした。自分をもっともっと押し出していくことを進めてもみたが、少々戸惑っている様子も感じられたので、「自分出すのちょっと怖かったりする？」と尋ねてみた。すると、「いや、結構出せてると思ってた方だったんですけど…。うーんと……。いえ、そうでもないかな。友人の前では結構個性的な人物として振る舞ってはいるんですけど、親の前では友達が見たらびっくりするような自分で話しているの、自分は場所によって違う自分しか出せていないかもしれない。」と話した。そして、将来を夢見ながら、自由で個性的なバウムが描けるようになりたいと話していた。そして、最後に本人の連想が働いたのか、白い

自然界の花が好きであると話をし、植物はその環境にあったように変化しながらその土地に根付くことを説明しながら、自然の中で自分のあうように進化するっていうのが好きだになって笑顔を見せた。

このバウムは正直にいうと実に平凡で個性のないように思われたバウムである。しかし、面談によりこれだけのストーリーがあった。面談の最後には、この人の個性が表現され始めたのである。バウムを表面的に平凡で標準的なものであると片付けられないことを認識するのである。比較的連想の浮かびにくい平凡なバウムでも、バウムを媒介にして話し合うことで、本人の本人らしさが現われてくるのである。

集団で施行し、詳細な話を聞けない場合は、平凡なバウムをどのように受取っておけばよいのであろうか。今、言えることは、平凡は平凡の意味があるということである。この描き手にとって平凡はどのような意味なのだろうと思いを馳せることであろう。そして、今一度バウムを眺めることも必要であろう。描き手のバウムをもう一度眺めると、線の伸びやかさに気づく。また、少々左に傾斜している木から、首をかしげている姿も連想できる。木が用紙の中で少々不安定に立っていて、強い風が吹くと根こそぎ倒れるかもしれないと思える。根がしっかり地面を捉えているようには見えないからである。また、幹先端は、藤岡（1971）の類型からすると、幼型の進化した道筋にあり、奥田（2005）のいう分化の処理がとられ始めていると気づく。いずれにしても、健康な成長を遂げており、適応的に生活をしている人でないかと推測されてくるのである。バウムからの解釈はこの程度に留めておく事が大切であろう。

一般の生徒・学生の心理教育にバウムを使用し、描かれたバウムだけから解釈する場合は、自分の視覚からの情報をイメージに変えながら、紙面とバウムのバランスを感じ取り、そこにさまざまな知識を導入して、控えめな解釈と描き手を尊重する解釈をすることが必要ではないだろうか。ネガティブな指標は念頭に置きながらも一旦脇に置き、ネガティブだけでは終わらない、そのネガティブな指標にならざるを得ないバウム全体の必然性を感じ取り、そこに働く必然性を健康な生きる力と繋げながら解釈に結び付けることができれば、描き手の成長に寄与するバウムになるであろう。

6. 考察

バウムを学校教育の場で使用するときは、①バウムを使用するまえに心理テストの理念を確認し、②現代の生徒・学生のバウムにおける指標にみるいくつかの特徴を一応理解し、③集団でバウムを施行する場合の心がけとして個別面談を考えておくこと、などが大切であろう。さらに、①歴史的にバウムテストは職業指導の現場で用いられ、②誰でも気軽に

行える描画方法であり、③バウム施行時において拒否が少ないことや、④指標においては健康な側面を見出しやすく、⑤重要な指標になりうる幹先端の処理など精神的健康のリスク要因についても発達の成長過程の方策が考えられており、⑥個別面談を併用することで自己理解や自己成長を促進する可能性を含むこと、などからバウムテストを学校教育の場において心理教育として用いることの可能性について大いに実践検討していくことが重要であると思われる。

さらには、個別面接をも希望せず、人知れずバウムテスト施行によって傷ついた学生がいないとも限らない。より慎重な思考方法を構築していかなければならないだろう。

本来、自己理解や自己成長には時間がかかるものである。そして、学校教育での生活の中で、若者は多くの体験をし、そこから自己理解や自己成長をもたらされる。しかし、社会適応という意味だけではなく、自分の心の深い層の理解や成長と連動した適応に繋げていくことが必要な学生も多く存在すると思われる。そのためにバウムという方法を用いて、自分を表現し、振り返り、自分について自分の内面を見つめながら語り合う機会を作ることが、かなりの教育的意味を持つのではないかと思われる。

中学生、高校生は、人生を考えるだけの知識や哲学的思考力はまだまだ発達途上である。言語だけでは混乱の中に陥っていくこともある。非言語表現である描画の一つであるバウムは、木の持つ特徴が人の生きる特徴とシンクロすることから、人の生きる姿を象徴するものであると考える。このようなバウムを用いることで、言語だけでは表現できなかった自分について、視覚的に見つめ内省し自己理解を深め、曖昧なイメージから再び言語表現に至る可能性を持つバウムの機能を大いに活用したいところである。無防備に使用するのではなく、できるだけ方法論の検討とバウム施行者の研修と経験の積み重ねが出来る体制も検討しなければならないであろう。

現在、学校教育の現場は忙しい。時間をかけてゆっくりと生徒・学生の話に耳を傾け、少しずつ少しずつ自分を語るようになるという心の支援は時代に置いていかれているように思える。若者というものは生きていくことに静かに悪戦苦闘しているのではないだろうか。心の深い層に潜む自分自身を放置しても、ある程度人間は生きていくことができる。しかし、放置された自分はいつか叫び声をあげる。就職したあとすぐに退職してしまう現象や、正規職に就かずフリーターとして生きる若者が多い現象、また、若い母親の子育て放棄などの子育ての問題など、自分の心の深い層にとどかないまま生きていることの結果と考えることは無駄ではないであろう。せめて、学校教育を受ける機会を得た若者には、生きるということを実感し、自分というものを実感し、人との信頼感を伴った関係を実感するという、実感を伴った生活があることを教育的に体験してもらいたいものである。現実とバーチャル世界の分離の中に自らのバランスをとって生きていかなければなら

ない現代社会で、学校教育の場でしっかりと現実世界に身を置く自分の生き方に目を向けるきっかけとなるような機会を提供したいものである。教育相談は、問題のある生徒・学生の問題解決だけでなく、彼らの生き方に関与する可能性を含む業務であろう。

最後に、なぜ、描画を取り入れる際に十分な配慮が必要なのか、なぜ危険があるのかについて触れておきたい。青木(1984)は、バウムテストから意識的なものも、無意識的なものも含めた、その人の性格の読み取りをめざす目的があることは間違いないとする。そして、そうである以上、描画から、「表出衝動の永続的形跡」として、また「記述運動の痕跡」として、「表現的特質や相貌的特質を見出す」必要があるとしている。ここには、絵を描いている行動と行動の結果表出された絵という概念が捉えられており、「表出する主体の側の意図、意欲、自発性が必要であり、表出の受け手である他者もまた受け手として然るべく機能している時にのみ、表出はその表現としての要素も活性化され、より多くのものを語りだす」と、描画を取り入れている場面と描画の力動的機能を描き出している。表出とは「他者への語りかけ」であり、「時間と空間、個人の枠を超え出んとする闘い」であるとも言う。「ただし時空間を異にすると、自己もまた他者性をおびるし、時空間を共有してさえも、個人内の意識的主体とより無意識的な客体を想定しうるので、自己内の対話としての表出・表現も存在しうると描画というものの特質を概念化している。さらに、描画はその痕跡を残す性質に深い意味があり、「たとえなぐり描きであってさえも、その表出・表現は固定してくれる。いわば記述に加えて相貌としての<私>の一部が固定されて、親などに代表される他者・世界へと投げ出される。<私>とは意識的なものも無意識的なものも含めて、より個人的、私的なものをさす。描画は表出という意識的な創造物であるとともに、それが固定されて主体から離れていくことにその特質がある。それは創造物であり作品であり、まさに時間・空間・個人の枠を超えうるのである。しかし、<私>の一部が固定され、切り離され、他者の手にゆだねられるがゆえに、<私>の崩壊に怯える病者にあっては、描画はたま特有の恐怖をうむことがある。」と描画の機能について概念化している。描画の受け手は、固定された<私>の受け手であるのだから、限りなく重要な役割なのであると強調し、「描画法は結果としての描画のみを分析の対象としていない。描画中の筆順、ちょっとしたため息に至るまでの諸行動はもちろん、入室から退室までの全行動・前表現を対象としている表現の構造について含む」ことを指摘している。そのような状況下で描画は発達するとも述べている。

描画は、<私>の受け手としての描き手が、描画する行動を起こすことができ、用紙の上には<私>の一部を固定し、受け手がしっかりと受け取ることができる状況下において、描画自体が発達し変化するという一連の動きであると理解できる。受け手がしっかりと受け取るということは、受け手が描画する描き手と描かれた絵について自分自身の内的言葉に

敏感になり、その言葉に基づいて描き手と言葉を交わすことができるという過程が生じているということであろう。そして、青木のいう、「＜私＞の一部が固定され、切り離され、他者の手にゆだねられる」がゆえに、＜私＞崩壊にもつながるリスクも存在するということを留意しておきたい。

謝辞

いままで調査に協力してくださった筆者の担当した授業の受講学生の皆さんに深く感謝いたします。そして、諸事情により実名の記載を控えさせていただいたA養護教諭の熱心で真摯な教育活動に敬意を表し、その活動内容のお話を聞かせていただき、生徒さんのバウムを拝見させていただいたことに感謝申し上げます。

[引用文献]

- 青木健次 (1986) バウム表現の発達とその表現心理学的考察—投影描画法の構造特性をふまえて— 京都大学学生懇話室紀要14, 1-27
- 青木健二 (1986) バウムテスト臨床描画研究 I p. 68-86
- 藤岡喜愛ら (1971) 人類学的に見たバウムによるイメージ表現 季刊人類学 2, 3-28.
- 金沢歩美 (2012) 現代青年のバウムテストにおける基礎的研究—幹先端処理に着目して— 大妻女子大学修士論文 p.1-46
- 岸本寛史 (2002) バウムの幹先端処理と境界脆弱症候群 心理臨床学研究 20 (1) 1-11
- 岸本寛史 (2006) コッホにとっての「心理診断」 学園の臨床研究, 富山大学保健管理センター 5, 27-36
- 岸本寛史 (2010) カール・コッホについて 岸本寛史ら訳 バウム・テスト 第3版—心理的見立ての補助手段としてのバウム画研究. 誠信書房
- 松下姫歌 (2005) 精神病院での心理臨床におけるバウムの意味について 山中康裕ら編 京大心理臨床シリーズ1 バウムの心理臨床 創元社 p248-197 所収
- 中井久夫 (2013) 「思春期を考えること」について ちくま学芸文庫
- 中島ナオミ (2008) コッホのドイツ語原著における58指標の判定基準 関西福祉科学大学紀要12 71-90
- 奥田亮 (2005) 幹先端処理において体験されうること—幹先端が描き手の何を引き起こすか 山中康裕ら編 京大心理臨床シリーズ1 バウムの心理臨床 創元社 p182-197 所収
- 高橋雅春ら (2010) 樹木画テスト 北大路書房
- 山中康裕 (1976) 精神分裂病におけるバウムテストの研究 心理測定ジャーナル 12 (4) 18-23. 山中康裕 (2003) 山中康裕著作集5 たましいの形—芸術・表現療法 (1) 岩崎学術出版 p92-103 所収
- 吉田芙悠紀ら (2007) 青年期の友人関係とバウムテストに見られる特徴との関係 広島大学大学院心理臨床研究センター紀要 6 p113-128